

## 葬式本

浜田 道雄

タイの葬式期間は一般に長い。庶民でも一週間はかけるのが普通であり、王族や著名な実業家、社会的地位の高い人の場合は三ヶ月にもなることが珍しくない。先年亡くなった前国王の葬儀が一年間だったことは記憶に新しい。

この長い葬儀の間に日本のタイ研究者が「葬式本」と呼ぶ書籍が作られ、故人と関係のあった人々に配られることがある。故人が王族や実業家など社会的地位の高かった人の場合が多い。

この葬式本には故人の生い立ちや家族、家系、生前の業績などを専門家がまとめた論文だけでなく、故人が所有しているは蒐集した社会的にも貴重な文献、資料が収められる。葬式本は決して故人を褒め称えるためだけのものではない。

有名なものには一九八八年に亡くなったバンコク銀行の創業者チン・ソポン・パニットの葬式本がある。チンは一代で東南アジア有数の金融機関バンコク銀行を立ち上げた大実業家だった。だから、彼の葬式本には追悼論文だけでなく、バンコク銀行の社史や経済、政治、経営などに関する多くの文献が含まれていて、タイの社会史、経済史、

経営史を研究するものにはなくてはならない貴重な資料となっている。欠点は、葬式での引き出物だから関係者以外は手に入れるのが難しいことか。

私も葬式本を一冊持っている。ラーマ五世の孫プリンス・パヌパンの葬式で配られたものだ。王族の有力者であった彼は多彩な才能の持ち主で、タイ映画産業の草分けであり、仏教美術の著名なコレクターでもあった。盆栽の愛好者としてタイ日盆栽協会会長も長く務めていた。プリンス・パヌパンはこれらの幅広い活動を通じて海外にも多くの友人知己を持っていたから、彼の葬式本に収められている映画産業史や仏教美術研究にかかわる論文、写真といった資料の多くはタイ語だけでなく、英語にも訳されている。それ故私にも読みやすく、なかなか面白い本である。

ところで今年私は七度目の年男。このタイの慣行を真似て自分の葬式本を考えてもいいころかと思うが、残念なことに私には専門家に書かせるような誇るべき実績もなければ、金もない。といって「自分史」などを書くほど自惚れてもいない。さて、どうしたものかと首を捻っている。

もっとも、葬式本はもともと自分が用意するものではなく、死んだ後に家族や友人が考え編集してくれるのだから、私がいまクヨクヨすることではないのだが。